

釣りバカ日誌17 あとは能登なれハマとなれ!

2006(平成18)年8月6日鑑賞<梅田ピカデリー>



監督=朝原雄三/出演=西田敏行/三國連太郎/石田ゆり子/大泉洋/谷啓/益岡徹/浅田美代子(松竹配給/2006年日本映画/107分)

……『釣りバカ』シリーズ第17作は、「スズケン伝説の Madonna」を演ずる石田ゆり子がヒロイン役として登場。能登半島を舞台に、郷土色豊かに展開されるのは、そのヒロインの再婚をめぐる物語。その分、若干レギュラー陣の存在感が薄いくらいはあるものの、シリーズ本来の楽しさはサブタイトルどおり……。さらに今回は、スーさんの経営哲学が燦然と輝いていることにも要注目!

第4章

映画で社会参加

 監督は同じだが、国際色から郷土色へ……。

昨年の『釣りバカ日誌16』(05年)は舞台こそ九州の佐世保だったが、ストーリーとしては、イージス艦の中に入り込んでしまったハマちゃんこと浜崎伝助(西田敏行)が髭ぼうぼうの姿になって登場するという国際色豊かな(?) つくりだった(『シネマルーム9』296頁参照)。しかし今回は一転して、石川県能登半島の輪島や金沢を舞台とし、その伝統の中で暮らす人々との接点を描いた郷土色豊かなつくり方に……。

そこで、監督が変わったのかと思うとそうではなく、2003年の『釣りバカ日誌14』から今回の『釣りバカ日誌17』までは朝原雄三監督がシリーズ4連投をしているから、これは明らかに朝原監督のイメチェン戦略によるもの。舞台をある地方に設定し、その郷土色をふんだんに盛り込むのは、ある意味できわめて安易な手法だが、『寅さん』や『釣りバカ』シリーズではそれが定着しており、日本人の郷愁を誘う何よりの手法。さて、そんな第17作の郷土色をあなたは好き、それとも……?

ゲストがヒロインに……？

『寅さん』シリーズでも『釣りバカ』シリーズでも、マドンナの取扱いが大きな焦点となり、その人選と取りあげ方如何によって作品の成否が分かれることになる。もっとも『釣りバカ日誌』におけるマドンナは、必ず1度は寅さんが恋をしてしまう『寅さん』シリーズにおけるマドンナほどマドンナ色は強くなく、ゲスト的取扱いが通例……。

ところが、『釣りバカ日誌17』では再雇用制度になって契約社員として職場復帰し、営業三課に配属されてきた「スズケン伝説のマドンナ」こと沢田弓子（石田ゆり子）が大きなウエイトを占めている。というより、彼女をめぐる人間模様と恋愛模様が『釣りバカ日誌17』の主要なストーリーになっているから、ここでは彼女がゲストやマドンナの枠を超えてヒロインに……？

演技力がしっかりしているうえ、誰からも好かれるキャラの石田ゆり子だから、ここまで主役級の扱いをされても観客はあまり文句を言わないだろうが、あまり好みでない女優に主役級の役割を与えると『釣りバカ』本来の（？）「バカさ加減」が大好きなファンは離れていってしまう危険も……。

観客はうつろいやすいもの……？

8月7日（月）の朝一番の大ニュースは、長野県知事選挙で三選を目指していた田中康夫氏が村井仁氏に敗れたこと。その評価はいろいろだろうが、私が思うのは、県民が知事に何を求めるのかはやはり曖昧で、飽きやすく、うつろいやすいものだという事。したがって、良くも悪くも今回の結果は、田中康夫氏が長野県民の気持をつかみきれなかったため……。

これと同じように、いくら人気シリーズであっても、政治以上にうつろいやすいのが映画ファンだから、その好みについてはいつもの確にリサーチしておかなければ……。公開日翌日の日曜日の夜7時40分からの劇場内はガラガラ状態であるうえ、年寄り夫婦がほとんど。果たしてこの『釣りバカ日誌17』が釣りファンはもとより、『DEATH NOTE』（06年）に流れている若者たちを劇場に呼ぶことができるだろうか……？

よくぞ生き抜いた鈴木建設……

ハマちゃんの釣りの相棒（弟子）であるスーさんこと鈴木一之助（三國連太郎）は鈴木建設の社長だから、本来ならば万年平社員ハマちゃんが気やすく口をきけるような相手ではないはず。ところが『釣りバカ』シリーズのこのコンビが面白いのは、スーさんが釣りが大好きなことの他、家族的会社経営を哲学（社是）としているスーさんが、サラリーマン失格（？）のハマちゃんをいつも擁護することによってギリギリのバランスを保っていること……。

そんなスーさんが経営する鈴木建設はいわゆる中小規模のゼネコンだから、この『釣りバカ日誌』第1作が公開された1988年12月の土地バブル絶頂期は良かったとしても、その数年後のバブル崩壊後は厳しい経営を余儀なくされたはず。私はこの『釣りバカ』シリーズをそんなに真面目に観ていないため、「ゼネコン冬の時代」において鈴木建設がどのように「耐えた経営」を行い、また、真っ先にリストラ対象とされるべきハマちゃんがどんな待遇をされてきたのかよく知らないが、鈴木建設はよくぞ「失われた10年」を生き抜き、次々と新規プロジェクトを立ち上げてきたものと感心。

輝きを増すスーさんの経営哲学！

この『釣りバカ日誌17』では、そんなスーさんの経営哲学が趣味の釣りの現場ではなく、本職の経営の現場すなわち役員会における議論でかなり明確に……。その第1は、役員たちがビルの管理会社を立ち上げ、苦勞せずに収益をあげようとした提案に対してそれを是とせず、「わが社はあくまで建物を建設することによって社会に貢献するのだ」という哲学を披露するシーン。そして第2は、大きな利益を生む巨大プロジェクトだけではなく、収益は少なくとも今後社会的に必要とされている「ケアセンター」建設に前向きに取り組むとともに、そんな小さな建物の起工式にも社長が自ら出席すると宣言するシーン。

土地バブル時には「土地転がし合戦」に参加せず、またバブル崩壊後の冬の時代には建設会社の社会的役割に徹するという経営姿勢を維持してきたスーさん流の経営哲学が、17作目にもなると燦然と輝いていることに注目！

あなたが抱く能登半島のイメージは……？

金沢のまちや兼六園は昔から私の大好きな場所だが、残念ながらその奥の能登半島や輪島方面には私はまだ観光に行ったことがない。

能登半島は、松本清張の推理小説を映画化した『ゼロの焦点』（61年）や『鬼畜』（78年）の舞台としても登場するし、あの名作『砂の器』（74年）にも登場する。さらに、1977年に『津軽海峡冬景色』の大ヒットをとばしながら、既に人気が先行していた岩崎宏美からいじめられていたらしい（？）石川さゆりの小ヒット曲（？）にも『能登半島』がある。こんな情報から私が描く能登半島のイメージは、日本海に面した、何となく暗く陰鬱なもの……。しかし、この映画に登場する能登半島にはそんな感じは全くなく、釣り場、朝市、キリコ祭りと明るく楽しげなイメージばかり……。そりゃ『釣りバカ日誌』ではそうでなくっちゃダメだろうが、あなたが抱く能登半島のイメージは……？

恋の勝者は……？

前述のように、この『釣りバカ日誌17』では沢田弓子がヒロインだが、この弓子をめぐるテーマの第1は、彼女の「再婚問題」。別れた亭主は映画には全く登場しないが、高学歴で高収入の外資系会社のエリートサラリーマンらしい。そしてそんな男が、（そんな男だからこそ？）妻に暴力を……。そんな夫からやっと逃げ出すことができた弓子は今は1人アパートに住み、つつましかな生活をしているが、離婚歴のある女といってもやはり美人は美人……。

そんな彼女にまず一目ボレ（岡ボレ？）したのが、ハマちゃん家の近くに住み、釣り船屋「太田屋」を営む太田一郎（中本賢）。これは人はいいいものの、ハマちゃんが的確に指摘するように、典型的な低学歴、低収入の男……。他方、同じく会ったその瞬間から弓子に一目ボレしたのが、向かいのアパートに住む高校で美術の臨時講師をしている青年、村井徹（大泉洋）。こちらも低学歴、低収入は同じようなものだが、美術を専攻しているだけに感性だけは鋭そう……。もっとも感性が鋭いということは、ある意味変わったヤツということでもあると思うのだが、この村井徹はまさにその変わりモノ……。こんな、別れた亭主と比べれば明

らかにレベルの低い恋の競争（？）における勝者は果たしてどちら？

輪島塗りのお勉強も……。

弓子をめぐるテーマの第2は、輪島塗りのお勉強。弓子の兄であり能登の漆職人である佐伯聖一（片岡鶴太郎）は、仕事に関しては職人氣質丸出しの頑固モノだが、妹の将来を真剣に考えてくれているいい兄貴。そしてそれは妻の加代子（宮崎美子）も同じ。したがって、離婚して既に2年も経った弓子に対して勧める見合いの話は、太田や村井に比べれば格段に条件のいいもの。ところがそこで弓子が言うのは、「男の人と一緒に生活していく自信がなくなった」という、かなり深刻な心理状況。「それでも、会うだけ会ってみては……」という勧めを完全に断った弓子だったが、そんな弓子の実家を、能登で建設することが決まったケアハウスの起工式にスーさんのお供で出席したハマちゃんが訪れたから、ちょっと話はややこしいことに……。

それはともかく、能登を舞台にしたことを最大限活用して、この映画では輪島塗りについてしっかりとネタを提供してくれるから、まじめにそのお勉強も……。

ポスト小泉以降も夏の定番に……

『釣りバカ』シリーズは、当初の1から7までは12月に公開され正月映画とされていたが、8以降は基本的に夏休み映画となった。実際、小泉内閣が発足した2001年4月以降は、14だけが9月にズレ込んだが、その他はすべて夏休み中に公開されている。『寅さん』シリーズの後を継ぐ長期シリーズはこの『釣りバカ』シリーズしかない今、いかにも日本的な風物詩となった感のある夏の『釣りバカ』シリーズは、今年9月の「ポスト小泉」以降も続けてもらいたいもの。もっとも、来年2007年7月は安倍自民党（？）VS小沢民主党（？）による天下分け目の参議院議員選挙の熱い戦いがくり広げられているはずだから、それに巻き込まれたハマちゃんやスーさんがひょっとして立候補、という奇想天外で破天荒なストーリーも面白いのでは……。唯一心配の種は、83歳になったスーさん役の三國連太郎の健康状況といよいよ還暦を迎えようとするハマちゃん役の西田敏行の健康状況だが……。

2006(平成18)年8月7日記